齊董集

卷之一

三三〇

2132

骨董集

醒〻老人積年所著小說九百不讓虞初世態情實毫厘不逭稗史野乘無所不窺若夫椎輪大輅質不勝文名物混淆鄙哉不鄙老人有感於此參伍今昨指擿誣僞著為一圭名骨董集鄉儒先生或嘲之云此瑣〻者何足以辨矣吁大舜好察迩言孔聖數誦童謠孟子知齊東野語班氏称街談巷議後世如田叔禾委巷叢談胡元瑞莊嶽委譚皆是物也骨董〻非何氏搜下物也必矣比彼不知而作〻者移的就箭掩耳盜鈴則大有逕庭矣

余與老人同一癖。不浮不為之一解
嘲也。文化癸酉冬日。杏園主人書ヨ
緇帷之林下。

骨董集上編前帙目錄

上之卷

○好事之心得 一
○竹馬 三
○蝙蝠羽織 五
○舊吉原兩日のさゝ 七
○臭を呼て斗ニとゝの 九
○豆腐紅葉 十一
○錢湯風呂始 十三
○行水船居風呂船 十五
○伊勢風呂吹 附・風呂吹 十七
○目黒餅花 十九
○背威儀 附・紺屋之白髮 二
○背人之質朴 四
○曹人形 六
○髭男 八
○粉之看板 十
○ころびどとゝの下踏 十二
○風呂犢鼻褌 十四
○石榴風呂・鏡磨 十六
○金龍山米饅頭 十八
○耳垢取 二十

○臙脂繪賣 廿一
○おかとしの言 廿三
○浮世袋 廿五
○燈籠踊 廿七

中之巻

○名古屋帯 一
○おばけき・おめべ 三
○行燈 五
○女之編笠・塗笠 七
○浮世袋再考 九
○大津繪佛像 十一
○重箱・硯蓋 十三
○三線・鼓コヲ・古製 十五
○ちぐ〳〵の文様 十七
○祖父祖母之物語 十九
○打出小槌 附・猿・蟹合戦 廿一
○奈良・庭竈 廿三
○宗祇之蚊屋 廿五
○釜磨・猫之奪取 廿二
○駒形之螢 廿四
○初雪之句 廿六
○火燒附・地火炉 二
○挑燈 四
○笠の下ゟ布を垂 六
○桔梗笠 八
○奥板古製 十
○淺葱椀 十二
○二足三文 十四
○紫革足袋 十六
○題目踊・蒔繪香合 十八
○排游・無木 二十
○ちまき馬・きうり牛 廿二
○長崎・柱・箒・并・幸木 廿四

前洪目録終

江戸　輯

山東京傳

○好事の心得　一

日本永代蔵（刊行の年号なし。寛文よりの頃の事なるべし）云。むかし連歌師の宗祇法師の此所より泉州堺を
まゝ〳〵歌道のそなへ〳〵時ならぬ花木を求めよとなげくるあるとき〳〵の白米の
時胡椒をあひ求る人あり座中へとりてをきて一両うけとる三文うけとる
ちゞゝ小一句を思案して付けるをさゝへたゝろぎと宗祇殊外よろこばれ
さのゝ云こ」とあり〳〵小風雅を好も此志あるべし家産を破る基をもらんかゝひ
を蹴よ〳〵風雅を好むもひいめるべしゝられい人のたゝりたる話なるべし宗祇の
ゆめられ〳〵といふるがめづら〳〵且ゝらべのたゝろえもとめたいぞゝ

○昔の威儀附絆屋の白袴　二

昔いたゝの男女も威儀をたゝろふをたゝらとも威儀をたゝろふといふたち
よをほひを正たゝる事あり　七十一番職人尽歌合（文安宝徳の時代）の繪小ちゞゝ西人
高人ゝゝ小素襖を著女い頭を布みて巻上の衣をたゝりて著又いたゞが折て
著たる体をゑがけるをもて考へ知べ〳〵能の狂言い室町殿の御代其時小のぞき
ゝらたゝ物〳〵たゝを作りいゞゝ〳〵ありと古老の説あれが其出立も當時の風体
なるべ〳〵されば女ゝのぞたゝよ白たゝ布みて頭をたゝみ両のゝ〳〵を右左小結たれて
たれをめがう〳〵といふ掛衣をたゞ折て著さゝも　職人尽の繪ゝゝ〳〵めくびせ
今ゝゝおゝを四百年ゝど前の民の女の風体い能狂言のゝぞたゝをゝんとおかむゝを知べ〳〵
南留別志巻之二小云。田舎の女い木綿のひとへなる物を常ゝたる上ゝゝを礼服ゝゝ
古の小袖なゞのゝたれるなるべ〳〵又ゝたゝ巻をゝるを礼儀ゝゝ職人狂歌合なゞの繪小も能
の狂言小もなるゝゞゝ〳〵たみの女の装束なるべし」とあり田舎人い老実なるゝゝ古風
を失ひゝ昔の威儀のゝ〳〵ものゝゝゝ残ゝり○絆屋の白袴といふ諺今もゝゝゝ
なる諺あり　山乃井（慶安元年印刻）巻之四ゝ「ゝゝたゝゝる雪や絆屋の白袴」といふ句あり　崑山集

寛喜四年撰 明暦二年刊

も此句を載て貞徳のものとあれば今はなるべし案ずるに當時の綉屋は常に袴をきてゐるものゆゑ此諺もありしなるべし今の世盲人猿まはしなどの者は袴をきると性女の常ゆゑ打掛を著るごとく往古の威儀のごとくなるべし

○竹馬 三

唐山の竹馬の戯は後漢の時よりあれども唐山の竹馬と異なり葉のたゝれたる生竹を繩を結びて手綱とし扨ふるがりて走るを竹馬の戯といふ竹馬の友といふは則是なり左様に撰しなせるゆゑ古昔をうるべし今の世のごく弱の頭の形よりたゝるたる物をいはらぜ

袋草紙 雜談の部に云。壬生忠見幼童之時内裏より有石無果物とて難参之由と申然ば竹馬ゆゑ参りて可参之由有御定仍進此歌

竹馬いふ〜ぜちゆ〜ちとよろ〜今夕ぜゆゆゆのりそゆゆらん

天木抄 竹馬を杖ゆゆ今いたのむるゆらん性びを毋ゆひぞゆ 西行

新撰六帖 五 竹馬ゆあたゆゆ〜ゆれ〜そのゆゆのようゆゆれども忘れゆゆ

九條三位入道知家

右の古歌を考るに或いゆ〜ぜちゆ〜ちとゆひ或い杖ゆたのむとゆひ或いゆゆれ〜といふにてたゆゆちゆゆと古昔の生竹ゆ乘たいゆゆゆゆ〜ゆ〜ゆ

異制庭訓 遊戯の事をゆ〜ぐゆゆる者ゆ。竹馬馳といふことあり左よあらゆゆと古昔の如く生竹を馬ゆて馳ゆらべゆる事ゆゆ異制庭訓ゆ虎関和尚の作ゆれば

ゆゆゆとゆゆ 下学集 騎竹之年 指丫角之童子 五竹馬之年也 とあり騎竹とゆるも竹ゆ騎戯るゆの謂ゆるべし

○昔人の質朴 四

一代女 貞享三年印本 一之巻ゆ云。此四十年跡よりゆ女ゆ十八九ゆゆ竹馬ゆ乘て門ゆ性びゆ男の子もさぶゆゆて廿五ゆゆ元服ゆ〜ゆゆ〜ゆ〜ゆ変る世ゆゆ」

按るゆゆゆ四十年跡とゆるゆ正保の比ゆあれ是正保ゆ今文化十年ゆりゆゆゆ百六十七年ゆゆど前ゆり當時の人情ゆ質朴ゆて性無ゆゆゆゆ

古代竹馬圖

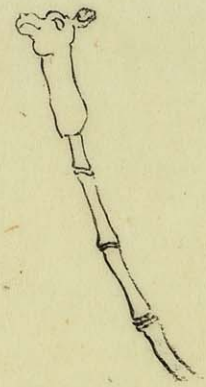
此畫いえ祿十三年の印本
四光大師傳のうちより
摹出せられい正和年中の
古畫を摹して刻したる
らしあれい因まること久し
正和年中ハ今文化十年より
あらまと五百余年の
ふるい昔なりあるべし

五百年の
昔のいにしへ
遊の情
今と
ふたつ
ふるべし

狂畫苑 安永四年初本 刊 百鬼夜行の古畫を
編し出せり其うちに此畫あり戲畫
なれども當時の竹馬のさまをしる便る
べし 好古小錄 小本朝畫史を合考すべ
百鬼夜行の明德の比の古畫なり明德ハ
今より文化十年にいたるまで四百二十餘年の
昔なり 猪の頭の形よくしる竹馬も
ふるくより物なるべし

百鬼夜行の古畫の戲畫の怪物
なれば竹馬よ足をうれたる
ものにそらごとなるべし
唯そのあらひをを
しんのこ

唐山の古銅器に童児竹馬を持たる形を
鑄たるあり銅色宋時代の物とのの鑒定
あるゝ〜その臨本を得て竹馬のさまを
ちかうつゝしのびぢりこれを宋の
宣和年間の物と
さだめあるゝ紀八
本朝
鳥羽院の保安の
比よりあるゝ保安
より今文化十年よ
りてあるゝ六百
九十餘年るゝ古紀を考るべ〜
児五歳ゆゝ〜槌車の
樂あり七歳すゝ〜
竹馬の歡ありと槌車に
對ゝてつれが唐山のに此間の如紀竹馬あらん
彼是を參考に考るに生竹を馬とするに
日本樣るゝらん駒の頭よつくるに唐樣るゝらん
中昔よりこのゝ〜彼も是もあり〜
るべ〜



○蝙蝠羽織圖

書花園蔵

此繪筆者の詳なるを知らざれども画風を以て時代を考るに寛永正保の比の古画にてあらん其時代の繪に合せ考るにそれがおもかげなるべくとおもはる

慶安二年の印本 [恵之双紙] 上之巻にみドクたる物の品しなを列る条に「袖ろ〜ろんりんがりくあり云〜」とあれば蝙蝠羽織といふことなるべし此繪の羽織のもようは当時の蝙蝠羽織なるべしとれを寛永正保の繪と決むれば今文化十年より凡そ百七十年ばかり前のひゝなりなる

袴の文様は田字草なり。それ [本草綱目] の蘋(ヒン)(ウキクサ)なり。今は花ばかりなり。

武清縮写

○菖人形 六

増鏡 うちの雪の条に「五月五日菖蒲の根を玉などもてあそぶ」とあり。御ぶとの根を玉などもてあそぶ。

後深草院位につかせ給ひしとき

「建長三年辛亥五月五日の事なり」南畝叢書に載る某の随筆に

右の増鏡の文を引て云「菖花の紙をもて菖を作り其上にさまざまの花をかざりあるひは紙にて人形をつくりなどしてうらにのめそめそびよもるとなり」今の端午の菖蒲菖は此遺制なるべし」とあり。おのれ此説によりてこれを日本歳時記 享和五年印本 のうちの繪をみるに菖の上に人形をつくりたる菖あり。これをもて菖人形とのみ名目は原菖の上に人形をたてたるをもいふなるべし。後に菖と人形と別の物になりて人形ばかりをも菖人形とのひ畧。又菖とばかりもいひたるべし。然則右の随筆に菖の根は菖のうへに紙にて人形をつくりたるなどせるとあるは誤なり。合菖人形は菖の根の遺制なるとは疑なきらん菖人形とのみ義もなれり。

あらくるりたさ小横〜あらいと畫をえて考へ申すべし〜日本歳時記巻之四端午の菖蒲冑。太刀の事をいふる条ゝ此事むりゝ畳た紙ゝ人形をゝり分薄き板を冑の形ゝこゝらく或ハ菰の葉ゝて馬を作り或ハ木を長刀のごゝゝゝ小げづりゝどゝと戸外ゝ立侍りゝゝが近年ハ風俗美巧をこのみて木をりつて人馬の形をきざみまるりとまて彩色をゝどゝ或ハ甲冑をきて剣戟をゝて戦闘の勢ひをなしめて戸外ゝ立侍る是を冑とゝ云く」とあり按ゝ紙ゝ人形をゝり分板を冑の形てゝらくるとゝくゝ昔の冑人形の質素のさまゝゝべゝ貞享の時昔とゝくるゝゝれの比をさとゝゝ

○園太暦文和四年五月五日の条ゝ菖蒲甲の事ゝえゆれゝ此名目も昔ゝゝ事ゝり文和ハ九十九代　後光嚴帝の御宇ゝり

○因ゝ云山乃井慶安元年印本誹諧糸屑元禄七年印本等五月五日の条ゝ。菖蒲ゝ。菖蒲のゝりゝどゝなゝらゝゝて削懇の甲と云名目を出ゝり木を削ゝて冑の形ゝ作りたる物歟

貞享五年板日本歳時記巻之四ゝ此ゝあり

右の書ゝ人形を

あらき紙ゝ

赤糊ゝつゝたゝ

冑人形圖

一種

人形冑

此冑ハ延宝天和の時代の繪のうちゝり草画ゝて微細ゝゝゝゝゝゝゝ考證のひとゝゝ横〜ゝゝゝ

○書吉原の雨中のさま　七

万治二年印本　私可多咄　香花園　藏本　小云ひ〳〵　江戸のうれめい蔑ろとりみ所す
ゝむ也中界此処乃遊君は雨ふる時めるい道あきまいろく袴ゐいあゞ袴小走たる
奴のもるゐ小負て出たりあるさまと奥あれば雨とぜ〳〵まにそゝ宿の門小入ゆれば
たれせうんよゝ仕る
ほく井筒井づにうみ〳〵ろく袴縄負に市ひ小身もんざるまに
あとよりまうろい肩ぐまをきまるに全盛ちく〳〵まるまゐれば雨小ふりと
つれて遊女ゝ〳〵
ちらぐて〳〵ふをるけがをの肩ぐ袴い君ならぐ〳〵たれうあぐべき
とるんよみ〳〵と也　異本洞房語園　享保五年ノ記　小云ひ和年中元よう〳〵京の北雨のある時い
拉女ども揚屋〳〵通の小下男どりふおれて行りおれ抵い六尺い縄をもて常と
雨のまをう〳〵ろかてををあ拉女いなぐた小袖まて足をほ〳〵みりもをを長くたまて
両の膝を六尺の手のうへふのもて臂をたり衣紋のつろひて後より長柄の傘を巨
ばけまをたる粋あり〳〵品ゝ〳〵えゝ〳〵」と也り其古曷を摸〳〵て左ふあちいぜを。貞享
元年板　三代男　詞花堂　藏本　一之巻小江戸三堅の薄雲が揚屋入のさまを巳たる
条ゐ云　紫立たる曙いうをぐもさまのおむりひふあんつきの傘角助がさ〳〵掛
肩で風きんてちら〳〵ぬる紫い玉雨枝ゐた白梅落と詩人ゐどの詠むぐた呼さ
角助が背中小乗うりあるいさまい如来ゝ〳〵ふおれあん身よりの光を
云ふ」とあれば古原今の地小うりて後も負ゐて揚屋入ゐる事あり〳〵欤
○因ゐ云元亀の比い高禄の武士の妻女も乗物小乗事ゐ〳〵嫁入の時も麻の
ぬぐきを着て負木とりふのゐ尻ゝけてう〳〵ろさまゐ負ゐてゐたけるう
古老の説あを當時の質素の風あをび尚ゝも残をたるゐるべ〳〵
●元吉原今の地小うり〳〵い明暦三年ゐり　私可多咄　い万治二年の板を
元吉原の時を書とりぐふ二年ゐれが證とるふたれり

右ふりの[私門多聞]とりの草紙のうちに此繪あり是則元和年中多くの大門通り吉原今の大門通り吉原あり一時のさまなり

今文化十年より二百年小近き昔なり○なり袖の長くきはいらもる六尺袖なり衣服のゆたのとみどり○下男はくくみ茶筅髪なり昔貧素の風俗なるべし

○右より引うちかる[三代男]のうちなるものくのぐさた番のれいぐもかゝりとりひたるれば模しいぐさも

奥書あり

西紀元文年季秋吉日

○髭男 八

[見聞軍物] 慶長十九 羊印本 小云「ろくゝ昔関東まて髭男をゞなりもくゝ髭男こゝひて

ゑもるゆゑる諸侍髭を願ひ髭をゞ鍾馗髭とて諸人好む鬼髭左

右へまろれゆゑ古記よりゆゑ此髭の事ありゆゑ左の髭をゞ天神髭とて武家

ゆゑのを好をたゆゑゞ云ゝ」ゆゑる詞のちゝ小當時の風体ろゝべし古画をろる小

髭ゆゑ男ゆゑれゆゑ昔ゝ髭ゝをゝ者ゝ假髭をゝちゝゝとゞ笑ける[西鶴大鑑]

ゆゑ髯男のことゝえたゝ

○魚を呼て斗ゝといふ 九

[饅頭屋節用集] ゝ云。和一国。児一女。呼一魚曰斗ゝ。類一説云。南一朝一人。呼一食為一頭。呼一魚為一斗也」とゝゆゑれゞ魚類をゝといふゝゝゝるゝ綱

ゝゝ泉の堺の魚屋ゝ斗ゝ屋といふ家号ゝゝゝゝゝゝ

石節用集ハ林逸の作ゝゝ[辨疑書目錄]抽字唇目の部ゝ節用集真書本二冊文亀本ゝゝ其後慶長二年の版本ゝゝゝゝを粗べ[條訓]祭ゝ。男女の髭ゝ魚をゝゝゝ芝峯類説ゝ南朝時寅為斗ゝゝゝゝ「雖粗説也ゝゝ」ゝゝゝ

○粉の看板 十

ふるいの事 和名抄 粉 和名之路波毛能 とある色 長明四季物語 小春のきたるを

もつにおぼえて云く空のけしきよろしくてもるるのかをかおりかぐわしけれ

ばうつろふさくらもうつるさくれえこ とめんがふるいのとのふも古に称ありさえ稲の比

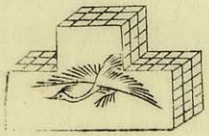
ふるいの看板よ白鷺を忍びたる事ありたくよめらつを昔の如く按ずるに

りのとりのたんじ物あるべく銭湯風呂屋よ木りて箭をたくを出して目ぢかくと

射れとりを湯入とりのよちんじさるたる類なるべう更よ雅なり

白粉師看板畫

元禄三年板
人倫訓蒙畫
素よりえたり



○豆腐の紅葉 十一

堺鑑 天和三年印本 下之巻よ「紅葉豆腐の事何國よも豆腐いめれども別て當津

のを勝たりと古人より云傳て紅葉と云名を加たるこの堺い櫻鯛ゆもらとも

味すれいとそ中〜ゆるとど物よ對る紅葉の縁なるべく又或人の云此豆腐を人

のかのようと祝て分たる名ともいり買様と紅葉と音便成由忘歟今豆腐

の上よ紅葉を印を詞よ就て形を顯るべく買用も通てう」中〜ゆ今豆

腐よ紅葉の形を印をる事堺の紅葉豆腐よ始まるり紅葉を買様よ

取るとい幼氣なれど黄い此類おかゆをこれいと色る名詮よそとるくのようを

りて祝とをるなり

○図小云古老の説よ南天とりの木い本名南天燭なり手水鉢のやよ植食物

のりいしたるどにをるい諸毒を解するなり鑛のやよ敷又い裏小鑄物なるど

をるい南天を難轉小取なりて難を轉ずるとりの意よそする禁厭なりとりて

紅葉を買様小取のとも此たびひるべ〜能の狂言鑑庵下とりかー
深草の土器よりんちんぐ〜のかい〜元をもとりかの事のり前よりかの
ぐ〜能の狂言ハ古元ことのり

○ところびどとりかの下踏 [十二]

文禄ようう寛永のかひどの古画をえるよりひさ元瓢箪を火打袋或ハ印籠巾著の根付と〜又ハ瓢箪ぐりをもびたる鉢をおろ〜えげて傳て云瓢箪ちびるハ轉ざる禁厳ようとこれよりそありかよ江戸の名物ところびどとりかの下踏のり其下踏ハ瓢箪の形を印ちるも原彼禁厳のゆよちる事かるまよころびどとりかの名をおらせちるよりとありるこハ扨のれが推當言なれどもとありひとりあこかよりよりき出つ

○江戸銭湯風呂の始 [十三]

寛永十八年印本 [そぐろ物語] 杏花園藏本 ハ云「そぐろいひ」江戸ちん拳のちゝめ天正十九卯年の夏の比ゝよ伊勢与市とかひしりの銭瓶掛のちゝりよちんたう風呂を一ツ立る風呂銭ハ永樂一銭なり宵人ばら〜元物武と入給ひぬさまども其比ハ風呂ちんまんの人ゆまゝ有〜めらかつの湯の雫や息がそはりて物もいれぞ煙ゆて見もめれぬるぐ云て風呂の口よ元ふさぐりぬる風呂をとのみ〜ぐ今ハ所為ハ風呂めりひさ十五歳廿歳ぐまて入せ云〜」これそ江戸の銭湯の始りなんとをあべー

○風呂牘鼻褌 [十四]

左よめらかて寛永正保の比の銭湯風呂の古画をえるよ牘鼻褌をひとびたるまく風呂入ちる体をえぐりまこハ画ユの心を用たる繪そらどこまと疑ありひこまりらぐど黄ハ民家のかまた者も風呂ハ入ゆのるぐふぐをとるること

[一代男] 天和二年板 [三代男] 貞享三年板 等のちよある銭湯風呂の畠をえるよ者ふぐをもとびて風呂入ちる体をえぐりけを

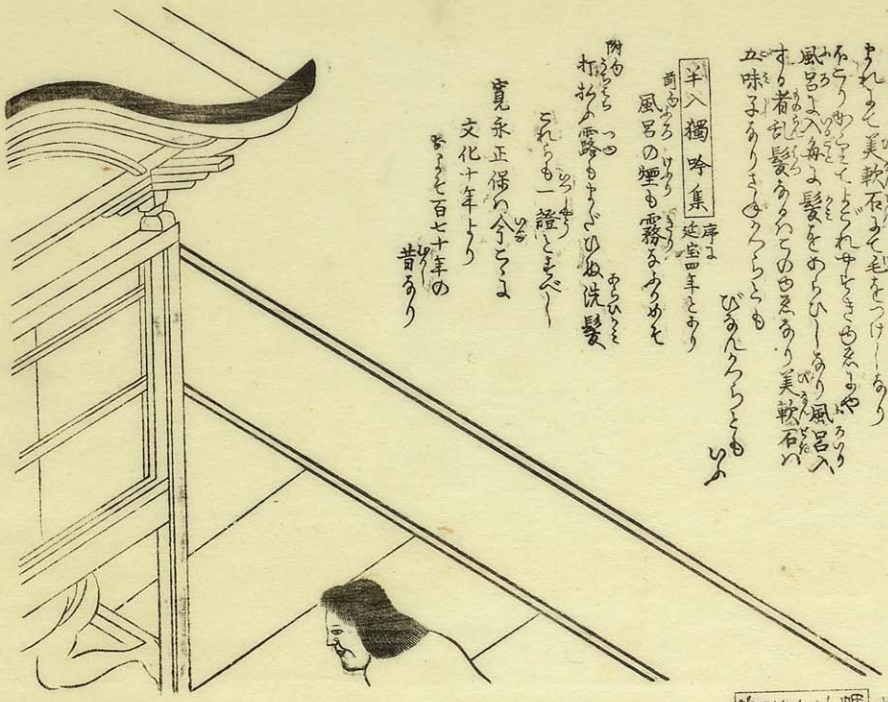
[愛大門屋敷] 宝永二年印本 一之巻小下半〜て風呂入ちる事をかり [御前独狂言] 宝永二年印本 五之巻ハ或人湧ハ酔風呂牘鼻褌をとて風呂入ちるをめちたとゝ笑たるとをあるせり

これ宝永の比までは風呂ふごとゝいふものありて常のふごにもとゞめて風呂ゆとて
あるる證なり

接ゝるよりふごを湯具といふもさるべきやいかん湯具といふもうなゐ湯ともいひ
なるべし湯巻といふもこれのたぐひなるべしいまの湯殿に仕る者の者なるべし

○行水船居風呂船 十五

日本永代蔵 刻煙めの手ぶりとゝいふも接ゝる更まの時代なるべし 四之巻よ江戸の事をいふる条よ或人船つたの自由
さるる行水船といふものを仕始て利を得たる事をなるとり 義理櫻 刻板の手ぶりは画用
一之巻よ和泉の堺の事をいふる条よ「六左衛門りと商人の子なれば行ゝ身をたのある
事をと工夫せしに万事えまゝなれば風たく嶋もあれ小舟よ居風呂をこらへ碇を
なる大船のあるをを漕めりた一人三銭の極めれいゝ安ゝ事ゆゑ泉酒をぬぐりて湯
だるまでも入るゝ出来合を喰ひ相撲のとゞけへゆゑ母のぐるら堪忍して船中ゆ
くらを工へ仕出し居風呂を重宝なれとり船一艘より五人十人づゝ此銭湯よ
へつりてあるたの銭をまうゝ云ゝ」とあれば行水船りおもひつたて居風呂船を
こらへ居風呂船より今の湯船といふものゝ出ぎ一なるべし



寛永正保時代銭湯風呂古圖

當時ハ男女ともよ髪賛付油を用る者
まれなる美軟石をもそ毛をつけ一なり
ゆえうりあるいとて、よくれ中をきめるやうや
風呂よ入毎よ髪をあらひ一なり風呂入
すら者も髪なるいてのもそなり美軟石ハ
五味子なりさるゆうらとも

びるんろうらとも

半入獨吟集 序よ延宝四年とあり

前句 風呂の煙も霧なるゆめを

付句 打ぬの露もまぐひぬ洗髪

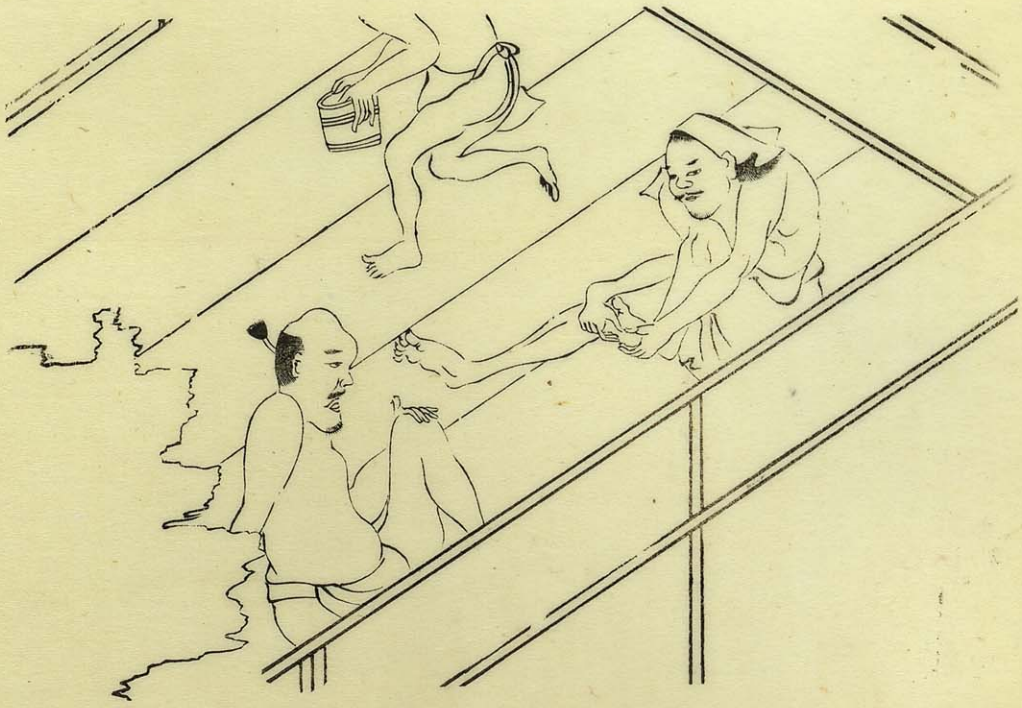
これらも一證とまべ一

寛永正保ハ今ろよ

文化十年ハ

ろくろ百七十年の

昔なり



其二

當時は常はは煙草をたばこ
たばこ遊行の
折はたばこ
事あれども
こづら懐中せど
奴僕ようぼくはたばこ
夫のと長し
きせるの頭雁の首よ
仰うるもろよ
雁首の名目残まろ
火皿のと大き

一代男

巻之二
寛永の
比の風俗を
五あつまつ

○此婦人の髪

○此奴僕のかしらは
いとゆう風呂敷
當時は風呂の
敷物
物を
つむ
料と
ありても
風呂敷の
名目
残まろ

○奴僕の
頭髪の
今と異

○此扁は古の浅湯風呂よりて
男女の乱髪は古よりのぢと
あらひ髪

骨董上編 上十二

○石榴風呂附鏡磨 十六

醒睡笑 元和九年作 万治元年板 二之巻に云いづれもおなじことなるをつよたゝをび風呂とひたゝ、
ゆあのゝ戸なをを柘榴風呂といなんぞいふやゆゞこゝるとのころあり」醒と云ゆゝいへるゝ
度詞あり爲こ入といふを鏡鑄といふよとりあゝたるあり黄い鏡を磨に石榴の実の
醋を用たるもあり今い梅の醋をもちゐ

七十一番職人尽歌合 ゆゞみとゞの月の歌に

水うみやざくろのたもとゆげるをやゆゞみとゞめる月のおりそへ

繪にも鏡磨のゆゞらに石榴を出たる所をかけり此歌合い文安宝徳のころ

つくりたりのとゝいば因きくることく〳〵

寛武独吟十句 天文九年吟慶安五年刻

前句 まやくろのありけるこゝのちのあり

附句 ゆゞみとゞさ嵯の中山をゆこえて

ゆゞれば天文の比も石榴を用たるべゝ是等をもて案に今江戸の銭湯に石榴ぜとゝ

名目あり〻石榴風呂のゑどゝまるべし然則石榴只石榴風呂より出たる名目まてさゝろ風呂ハ鏡磨より出たる名目なりゆゑ〻ゑたとゝも参考〻〻くゝるべ物〻ろ〻

七十一番職人尽

鏡磨圖

文安宝徳ハ今文化十年より凡そ三百六十余年の昔なり

○伊勢の風呂吹 十七

甲陽軍鑑 巻之九下 天文十四年の条に云「風呂ハゆゝれの國なれども伊勢風呂と中ゝ細ハ伊勢の國元なゝど贊風呂を好て能吹ゆさるゝ分て上中下ともゝ熱風呂を云〻在郷ゆゝ大方村一ツゝ風呂一ツゝ也さゝゝ夫ゆゝ上とゆゝ風呂ゝ

鏡磨古圖

画風をゝ考るゝ此繪ハ貞享元禄のちゝめのゝ
ゝゝ元たらんとゝ色とゝえ禄三年板 人倫訓蒙圖彙
ゝ鏡磨ハすゝ袋のゝりとゝゝゝ根を合て
底の粉をゝゝ梅酢ゝてとゝゝとあれゝ當時ハ
石榴ハ用ゝるべ〻古画ゝりとゝたてゝるゝ

問ふ玉鶴岡職人尽秋合
わいふ響の玄の秋よ
「夜ごろき物ごとに草を
なりとまてたちかりうれば
ありうげもの」
かれば昔酥醍醐草の
雛をもらひて物ごを
養ひるとうもあり〜〜ん

菊蒔繪

ゆべを在ゆいあつた風呂ゆ〜ゆ〜ゆ〜

るべし彼是を參考するに昔の風呂はかくいはら風呂なるべしあらんや帶をしてはいるもはら風呂は便宜なるべし 内證鑑 よりらしを汲とはいふとあり湯のとくをちらしとはひしあり○さて大根を煮くさて煙の立やどるを大根の風呂吹といふも息を吹かけてちらすさまの風呂吹に似る色なるべし

○金龍山米饅頭 十八

或說に江戸の名物米饅頭の根元は淺草聖天金龍山の麓鶴屋なり慶安の比此家の娘に孫とてるあり此女始てこれを製せるに鶴屋饅頭と云り此說うるはしたに摸し生を畫のごとく延宝の比に至て辻賣あり米をもとといふ米饅頭と云も米のまんぢうと云義なり女の名よりそよびたるなるべし常のまんぢうは麩まそてれいは 紫の一本 天和二年 に聖天町なるまんぢうを商ふ根本は鶴屋といふ菓子屋根本はかくの鶴やうみはらんよりまんぢうはたゞかりなるべし 遺佚

江戸鹿子 貞享四年印本 「米饅頭屋淺草金龍山のりとも同所鶴屋」とあり

江戸咄 先板は故郷飯江戸咄と題せ後增補し元祿七年の本あり 巻之五に真土山云々爰の山の麓のまんぢうを江戸中にまねしなる名物也云々ひとせせりふうに金龍山と同道たるべし

享保の比の板 江戸八景の繪本に金龍山聖天に三王門あり 當時にまんぢうのおもかげ

延宝六年板菱川の繪本に此辻賣の畫あり

江戸鹿子

眞土山の茶よ坂の登口又聖天町の門前も左右ともに茶屋あり此禁屋伊勢屋の饅頭の名物なりとそ

とめれば伊勢屋と云もめしあらん

享保年中印本
江戸名所百人一首之繪

○目黒の餅花 十九

目黒不動尊の門前にそこ〳〵の餅とゝのを賣りとゝお福の餅

愚按るに吳服のうちとあるまれとある物よりはるせるひがしとあるらん

吳服のうちとあるべし〳〵のうちとを中比ハぶ〳〵もとゝのつ神

仏より日毎よりのを供ぜるを日服といつるも中古より後のそなへ物

のうちもりと不動尊より供ぜるを忌て吳服とゝのあれば所ゞ服とゝひ〳〵あるべし後よ

忌服の服と同字なるを忌て吳福とゝひ龍草の茶屋今茶屋みそぢの茶まれ

まれとゝび入〳〵も觀音より供ぜる茶とゝのちろまん所服の茶とゝのちろまん

又昔りの不動尊の境内より大あり〳〵ありしとゝのみ

江戸八百韻 延宝六年板

夢ちやうちやうと思ふはその滝の音 青雲

閑や 目黒の原の犬がとびはく 来雪

延宝の時こゝらの名あり 宝永忠信物語 宝永二年板

目黒の名そのつる第よ

西めをさまるゼ〳〵栗のもち 水あるよ花の吳服りちゑ〳〵とゝえたり未あるよ茶

とゝるをりて老ろよ今目黒のもち花とゝの物ゝむ吳服のりちゑ木の枝よ

さて供じたるをゝりまとあるも 江戸砂子増補 よる目黒不動尊と飯櫃よ白

餅を入てごふのりちゑとゝ賣られもりたるのゝ参詣のとりゝ吳餅を

買て大よあらるゝ云ゝのとゝ享保のをゝゝものりとゝ近藤助五郎

清春がめたる江戸名所百人一首の繪草紙よその畠あり横〳〵

上よあらんとゝり

○耳の垢取　二十

江戸鹿子　貞享四年板「耳垢取。神田絆屋町三丁目長宜とあり毎年比京にあり

京羽二重　貞享二年板「耳垢取。唐人越九兵衛」とあり　初音草噛大鑑　元禄十一年板　巻之五に「京と江戸ゆゑ〜もちぐるる通町の辻〜をうれがるひい歯ぬけ耳の療治云〜」老人養草　正徳六年板に云近来京師の辻〜に耳垢取とて紅毛人のかたちに似たる云〜とあれば元禄の末正徳の比はなどもありしなるべし

五元集拾遺

観音で耳をやらせてかたぐるま　其角

此句も耳垢取のことをいふなるべし

一代男後日　刻板の年号なり〜按に西鶴が廿五年の遺書とのことなれば享保二年の板なるべし　二之巻に「松浦浮平戸といふ所に

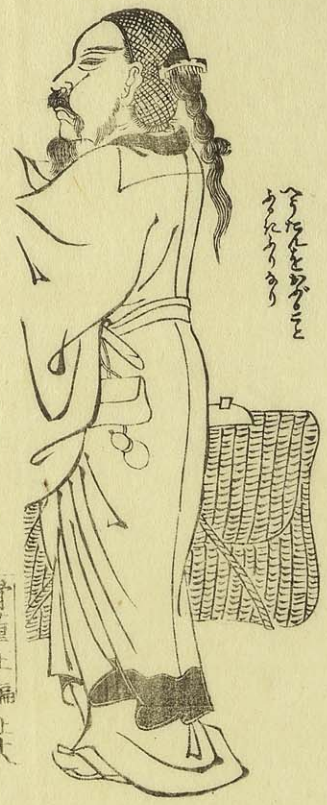
ぐるる草の屋をかりて気く髪を惣ぐるぐるまにして長崎一官と名を

ばせ都ぐるる耳の療治人の似せものと京の一官顔〜云〜」あり是ぞ當時京

に一官といふ耳の垢取ありしなるべし

耳垢取古畫

亡友大朝此畫を
模して予に
授けられえ
の繪なるべ



英氏画譜にも
耳垢取の畫
あれども草画にて
微細なるにおいて
此畫と異なること

○臙脂繪賣 二十一

按ずるに板行の一枚繪は延宝天和の比始れる歟朝比奇と鬼の首引土佐浄瑠璃の繪嵐の嫁入の繪の類と芝居の繪は坊主小兵衛を名づけるなど其始なるべし當時は丹緑青などをもぐらより彩色したり菱川師宣吉山師重等これを画けりえ縁のちろちろより丹黄汁をもて彩色されを丹繪とのみえ縁のちろちろより鳥居清信其子清倍等これを画けり宝永正徳以至て近藤清春出たり紅繪と云は享保のちゝめ創意なりのり墨に膠を引て光澤を出したるを漆繪とも云奥村政信ありこれを名づけ初て

[近代世事談] 享保十九年板云浅草御門同朋町何某とかの者板行の浮世繪役者繪を紅彩色して享保のちゝめ比これを賣幼童の戯として京師大坂諸國へいづくとなれ又江戸一の産とのりて江戸繪とのみ唱へあれども摸出せり享保の比の紅繪賣の畫なるべし 板行の一枚繪のちゝめは延宝天和と決しかの今文化十年に百年餘年を経たりなるべし

○釜磨并猫の蚤取 二十二

西鶴織留　三之巻に云ふ〜年の師走に竈の上塗を仕ようらるを手まつ〜びよれ事と思ひ〜に又ちの暮まへ達者なる男が釜みがにありきまる大釜五丈其外大小にならぶ二文ぢ〜迄云くま前に人をやうぬ者い繕ふ〜云く又五十なるを男風呂敷をうにうりて猫の蛋を取まちよと声立てまうりける隠居がの手白三そを〜ろ〜人とれとて頼まれるに一疋三文ぢに極め名誉に取げるまづ猫の湯を〜て洗ひぬれ身を其まま狼の皮にてみてたぢ〜抱けるうちに蛋ぞもぬれたる呼をうたてがたこみ狼の皮にうつりけるを大道へふるひ捨げる豊程の事みもそも何ともてて分別仕出し身を〜の種とおりぬ云ふ」

猫の蛋とりとの者あり

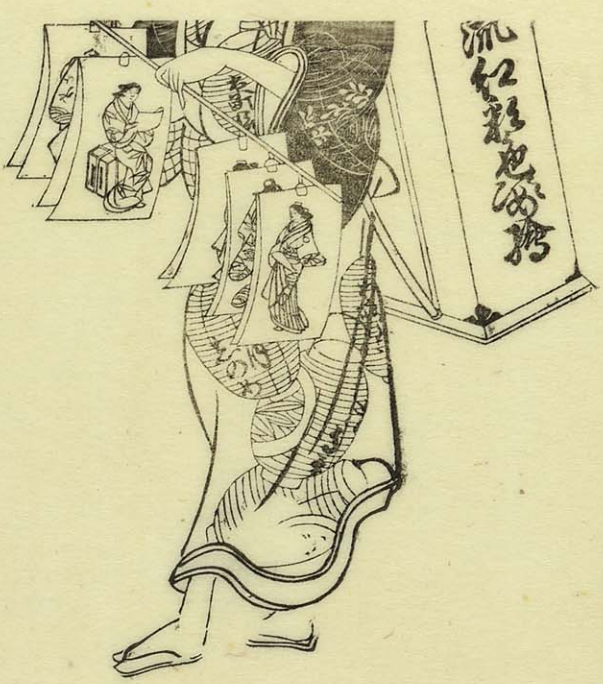
右の織留い西鶴の遺稿を正徳二年刻せるあり門人園水の序に半書遺せる酉の葉月に此をを去ぬとあるに元禄六年と右の書中に元禄二年とある時代をちん

舞のふき　元禄十七年板　の序に云大坂の西鶴が咄ならひさの風呂敷つくりをせるあるにあるて猫の蛋とろ〜とひて口過をする者ありと誰られ〜云ふ」ひろはてあたるあらん

臙脂繪賣圖

べにえ うりのず

うれい亭保のころの一枚摺の板行繪なり



暖雲斎藏

○おがとといふことば　二十三

御伽婢子い天倪の略制あり小兒のあそびちよ置邪崇をあいをる形代あり　雍州府志

天和二年撰　土産門小云白絹を以て人形を造り肉よ糟糠を充外白粉を施も昌を御伽母るとい

ふ此偶人え大小母子の形を造る始母子人形と称ゞ今人形の字を畧ーて之とのみ云」漢文書

今ゝうるえをもまい母るをとうこと引てのひとをとと通音あれがゝとともいふべーて人老

耄て小兒の如くまりたるを二度おがとといふ女子の幼氣ゝをおがと娘といふ戯のるをおがと

といふちがひちぐて幼をおがとといふとれ右の御人形ゝり出たるとゝびまて御婢ゝるをぞめたる

ことゝびまとありいるるとゝ遺とのゝびたとゝびまり　合類節用　恍惚ゝの三字をお

ゝびとと訓ゞ字書をとるよ恍惚の字義い今いふおがとの義まいおゝちゞる歟ゝおのれが

推當言ゝておがつまけれどもとりひとせたるまにめたいゝてあたつるまり

○駒形の螢　二十四

江戸雀　延宝五年印本十之巻浅草駒形堂の条ゝ云此堂い二間四面南向ゝり云と云ゝ信

力を催さんと此川のほとりを取て濃草へ参るとて忽に私つたすんと出私入私のあるを
さるゐい者を浦の渦帆とやヤさん九夏三伏のあるに比い風もでなに吹あて　とびゐ
螢水ようたり勝景めぐりあるに呼るゝ」とあり繪をえるに堂のかたらに樹木あり
弊をうゑり又 江戸名所記 寛文三年板 の駒形堂の畫をえるに木立蔭あるとあり堂もをるに弊ぐ

鳶尾琴 元祿十四年板
こゝのかたに舟をとゞめて
ゆくかたも眼前の体なるべし　今いかなるたまを入れ立つゞきて螢と化したる草だるゝ　其角
絶て繁花の地とうりぬ。元祿六年新形の殺生禁断の碑立今あれ　春ぜり右の句意を考るに
哀江頭八杜子美が七言古詩の題と哀江の字義をとり此碑立てる此川のうちのあるゝ　ひとあるまゝと
ひとこゝろあらん螢の光に碑文をてらせを車徹が故事あるともあるひとをたる歟

○浮世袋 二十五

武人古老の說あるゝに語て云幼女子針業をあらの婚に浮世袋とゝの物をこゝめら
縫て玩物とゝ綿を三角に縫綿を入れて袋めゝて上の角に糸をたゝる何の用
なに物あれども唯針業をあらのあるゝまとるゝ昔の狂女にたゝるゝを浮世ごゝひとゝの
あそびの氣の前に柳を三本植て横手を結暖帯を掛られにあそびの名を付に其やに

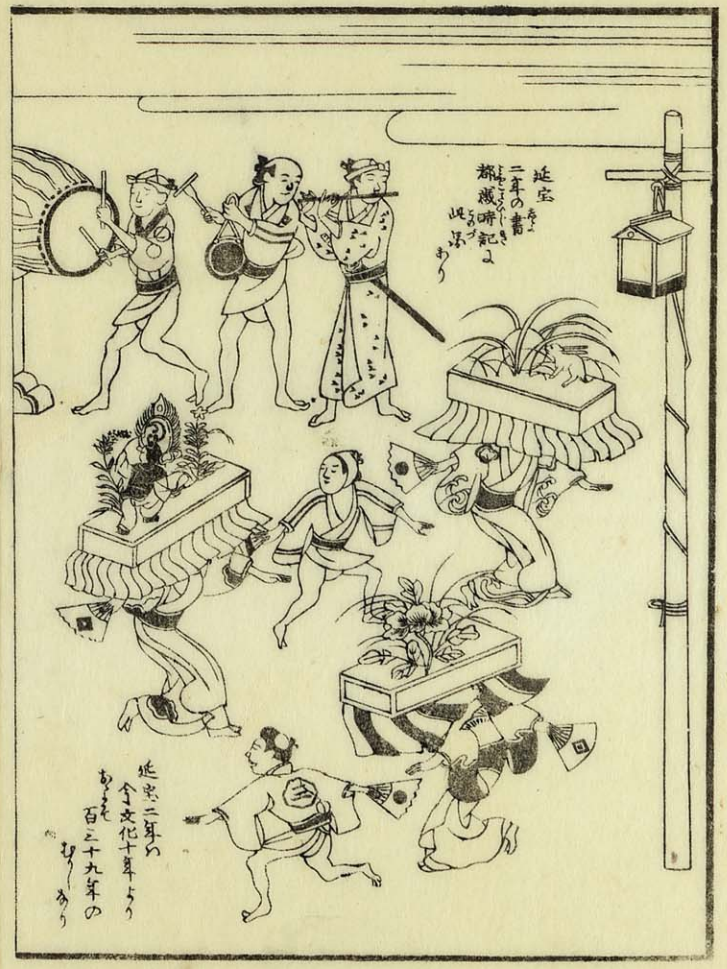
初の袋めゝ物をこゝめら縫てほゝめゝありこれを浮世袋とゝひるらゝたるゝとゝつを
五人娘 貞享三年板 巻之一に浮世ごゝひとゝのとあれば貞享の比まゝめゝひたることゝあるべし
又巻之三に浮世髻とゝのあり 一代女 貞享三年板 浮世髻 卯子酒 序に宝永六年とあり 浮世市著るゝ
いゝ名目ゝえたるまゝ　類あらん栗嶋とゝの踊歌の文にをれ針ゝこゝ猿ゝき世袋
雛形とゝあらべゝかゝて今栗嶋の神に手向る三角の袋めゝ物い則浮世袋なるゝとゝを
知りぬこれいとゝ面る謡歌の說をとゝるあゝとゝる考と我あゝらをゝ　栗嶋の神を女神と
謬るゝより童女針業に達さる願をゝけて浮世袋を手向るゝやあらん

○初雪の句 二十六

初雪や犬の足跡梅の花と云句何人のゝひゝゝたるゝ　童もらもさむゝ　五元集 なる
雜合 巻三云 雜去 画竹葉 是い五山汎の僧雪の聯句に犬走生梅花とゝる對あり云」

右の聯句よりとゝ欽或い暗合ゝたる歟

○燈籠踊の古畫 二十七



都歳時記 序に延宝二年とあり 巻之四に云長谷岩戯花苑に六字の念仏にて花をめぐり巧をほこりたる四角なる灯籠を戴てをどるなれども肝入りたるひとつ：きわめて品あるは都にもたぐひなし已此所なる氏神の前より踊ありて其年みまかりたる亡者ある家に行て夜更まで踊ありてなりわいたるを例年てらくたるはあれば由まなるもあれどたしかなる知者なしとや云と

日次紀事に云洛北岩倉花園両村中の女子各大灯籠を戴八幡の社前に聚て男子大鼓を撃笛を吹踊を勤む是を灯籠踊といひ冥戴頭上の灯籠踊る女子の家に春初よりこれを造り互に其作る所の模様を秘す 京書漢文今案ずるに右に模しあらはす其古畫あり

骨董集上編上之巻終